

「餓鬼道」と「極寒」、生きるためのギリギリの生活。そして畜生同様にこき使う強制労働。生き地獄の想いの抑留だった。

抑留生活とところどころ

新潟県 石川 卓

八月十五日、擇捉島山中に道路構築中、一人の伝令手によって戦争終了を知った。三角兵舎笹屋根の下で、青春の男たちがでっかい悔し涙で抱き合う。ソ連軍進駐九月初旬、直ちに我等は下山、天寧飛行場に各部隊集結、乗船のため、これより敗戦の実感が始まる。

昼夕食ともカンパン少量、塩気が全然ない。飲みたい水も自由に求められず、ときどき威嚇射撃で我等をおどす。一夜明けてソ連船に乗船、南下の進路をとる。故郷の山河を脳裡に描きながら着いた所は樺太大泊港、将校はここで帯刀を引き揚げられる。

船はまたもや東京ダモイのたまされ言葉で出帆、今度

は一路沿海州を北上、また一夜明けて、日に映った所はまぎれもなくシベリア流刑地。埠頭には四十車両余の二階建て貨車。これは本国より囚人輸送専用列車であった。

我等もこれに乗る。大隊長の訓辞では、一か月の長旅になるから、寒さに十分注意とのこと。そのとき直感したのがモスコワ郊外で要塞構築でもやるのかなー、完成すれば必殺間違いなしと、一瞬にして背筋に氷が入った思いとなる。

列車は夜通し走った。急の坂は一遍で登りきれず、何回も繰り返す機関車は、当時薪をたく。翌日午前に下車、一か月の長旅とは全くのうらはら、ここが我等の第一任地となる。まだ九月半ば前だが、朝霜柱でザクザク、兵舎は馬小屋を改築したものらしい。もちろん電灯等はなく飲み水もない。

作業は主に伐採で、機関車にたく薪専用。夕食の分配は松ヤニをともして明かりとする。朝起きても洗顔の水もなし。幾日も経つうちに目ばかりがぱちくりぱちくり、戦友の顔がだれかれの判断がつかないくらい。作業

は日ごとに過酷となる。食糧は黒パン二百グラムかトウモロコシ、大豆、コウリヤン、いずれかのおかゆ一品、それも極少量。飢えと酷寒と激労で、またたく中にOPPとなりた。

その上、たび重なるカロリーナの移動。行けども行けども我等の落ち着く場所にたどり着けない厳寒、零下二十度以上、鼻髭は真っ白。まつげは瞬くごとに凍りつく。呼吸のたびごとに鼻毛がまつわる。食べる物は塩漬けの凍りついたイワシが一尾。昼食抜きで夕食だけ頭から腹わたまで全部食う。一尾の小魚がおのれの生命をつないでくれると思うと、骨までかみ砕く。

着いた所は、寝る設備がない。馬屋だろうか、広間の中央にドラム缶ストーブが三か所。夜通し寒さで眠れない。赤々と焼けたストーブで暖をとるにしても、前面が焦げても背中針で刺されるような寒さ。戦友同志押しくらまんじゅうで勇気を養い、夜が明けた。ほとんど一睡もできない。こんな移動がたびたび。

さて、二十一年元日を迎えたが、今朝食べる糧秣が悪。どうやら受領ができたものの、それは糞である。食

べなければならぬ。窮すれば通じることなく、直ちに脱皮精白と十一時過ぎには元旦のおかゆができる。古郷の元朝を想像し生存を誓う。

第二年目の春が訪れた。明けても暮れても空腹の思いばかり、厳寒地のことゆえ、食べる野草すら生えない。ましてや生野菜等見ることもできず。したがって恐ろしい壊血病患者が続々、その他肺炎、盲腸炎、種々の病で入院、また幾十万人の同胞が尊い生命を断った。

また、現地に四季が全然感じられない。冬から一挙に夏、また冬、落葉松は七月上旬ごろわずか一週間くらいで新緑したたる夢の世界に様変わりをする。夏といえども重労働すれば、ちよっぴり汗ばむ程度。夕方の点呼は綿入り胴衣が必要。またもや待たなしにやって来る酷寒は、我等同胞を苦境のどん底に落とし入れた。

今度の作業は、小高い山を爆破して自動車道構築、昼夜交替のトッカ工事。外気はまさにマイナスの二十度くらい。鉄棒で穴を掘ってもカチンカチン。約一カ月もすると、ようやく二キロメートルの間八メートル間隔で、人間がすっぽり入れる穴ができ、トラック何十台分

のダイナマイトが詰め込まれた。

いよいよ同時爆破を敢行、一瞬百雷と大噴火の光景。

爆煙は天高く原爆投下のごとし。我等は事前に四キロの安全地帯に避難、夕食もなし、極寒地特有の長靴に襟の高い皮製の防寒具をまとい、空腹をこらえ、トボトボと歩く様は、実に捕虜とはこのやうなことから、親、兄妹、妻子に見せてたまるものかと、思わず空を見上げれば、天高く底抜けの大空に満月がまた我を見下ろしている。

時折船の汽笛も聞こえる。海が近いことが判断できる。しかし戦友同志間でダモイの日はいつなのか、さまざまな情報の中で、三年間我慢しなければならなかった。運命はだれ一人知るよしもない、しだいに移動も遠のいて来た。自分はオッペカローナ本部当番についた。

点呼が終わるとソ連将校が俺を呼びにくるとき、将校の館に行ってみると、留守番である。

二歳足らずのいとし子を残して、夫婦そろってのバクチ打ち。目を覚まして泣いたらのビスケットもあずかる。私もベッドの上でこっくりこっくり、午前の一時こ

ろに帰る。日本の家庭と比較するに、彼らの心情はとも想像もつかない。

しだいに共産主義の教育が厳しくなる。ナホトカ集結地で最後の仕上げ教育も受ける。ついに復員船に乗る日が来た。船内で幾度となく身体のそここを力一杯ツネって、俺は夢でないだと確認した。歩けないほど衰弱したあの当時、今なおある生命力を大切に、亡き同胞の冥福を祈る。

洗脳教育もノルマ

新潟県 猪俣 國雄

潜伏性マラリアにおかされて、セミヨノフカの病院。一週間で熱もさがり、病氣も治った。収容所へ返されると思っていたら、政治局員（ゲ・ベ・ウ）に「病院で働け、ことわれば射殺する」とおどかされ、しかたなしに病院労働に従事することになった。抑留仲間が各収容所から栄養失調やけがで毎日十人、二十人と到着する。い